学習支援に参加した大学院生の受け止め方

新井小学校における１月２４日と２７日の５年生の学習活動支援について、参加したそれぞれの大学院生は次のように受け止めていた。

＜Ｎ．Ｓさん（大学院２年生、現職（小学校））＞

１．こどもたちへの支援を通して、こどもたちから受けた印象等

外部の人間をあれほどまでにスムーズに受け入れてくる児童で、サポートをする方としても大変助かりました。基本的な操作技能（キーボード、保存等）が身に付いていました。そのため、サポートそのものについても、必要最低限のデモを行うことで、タイトルの挿入、アニメーション化、画面切り替え方法、動画の編集などを児童が進んで行うことができました。短時間の指導であれほどまでの技能を身につけられるのは、やはり子どもだからでしょうか。吸収の速さにビックリしました。

（「慣れる」ための授業であるため仕方ないかもしれませんが）児童も、サポート側も最終的な目標が明確でないため、最低限身につけなければいけないことは何かが分からずにいました。そのため、すべての児童が、集中してグループ活動をできていたわけではありませんでした。加えて、1 グループあたりの人数が 4 人以上いると、操作できない児童が、手持ちぶさたになる傾向がありました。やはり、情報機器は、経験上、誰もがいつでも操作できる環境を作ることが大切だと思います。

担任の先生方も、サポートに任せっきりにならず、積極的に関わっていただけたのはありがたいことでした。ただ、もう少し、サポート側と授業が始まる前に多少の打合わせがあると、分担がはっきりして、お互いに動きやすかったのではないでしょうか。サポートの人数としては、2 グループに 1 人いれば十分だと思います。授業後もフレンドリーに過ごせたのは少人数指導のよさがあったからだと思います。

２．新井小学校の先生方の授業準備、授業計画等についての意見・要望

初日は、正直どう動いてよいのか、何をしたらよいのかが分からず、どたばたしました。そのため、ビデオとパソコンの接続がうまくいかず、実質的に児童の活動時間が確保できませんでした。活動内容を聞いた上で、サポート側で、各種設定、情報機器の準備が行えるとよかったと思います。１でも書きましたが、単元の流れ、授業の流れが明確でないので、はっきりできるといいと思います。しかし、現場の人間の多忙さは、自分自身もよく分かっているので、指導計画、学習指導案といったものを作るのは反対です。口頭でも、メモでもよいと思います。

現場にいた人間としては、授業の全体は学校の先生、情報機器の設定・準備・指導はサポート側とするだけでも、ありがたいと思います。現に所属校では、情報の授業をするにあたって、「一人では不安だけど、先生がいてくれるなら・・」と何度も言われたことがあります。今後、情報教育（情報機器の活用も含めて）を普及させるにあたって、サポート

する人間がいてくれることは、やる気のある学校ならば、本当にありがたい事業だと思います。

３．１月２４日と２７日の５年生の学習活動支援に際して、どのような考えで、子どもたちの支援をしたか。

児童の「こうしたい」という願いを、答えてあげられるようなスタンスで臨みました。ただ「すぐに」「すべて」を答えるのではなく、一部を教え、あとは児童の自主性に任せました。最終的にどの技能を使うのか、どういった編集方法を用いるのかは、グループの話し合いを通して、決めさせるのがよいと思ったからです。一方で、担任の先生との指導とは、一定の距離を置きました。自分のクラスなら「指導（生徒指導的な言動）」する児童については、基本的には野放しにしました。児童との距離感もできていない状況だったので、興味のあるデモを他の児童に見せ、ひきつける程度のことしかしませんでした。そのあたりは、人間関係のできている担任の先生の方がよいと思います。今後も、「パソコンをよく知っているお兄ちゃん」的存在で児童の中にいればよいかなと思います。

＜Ｓ．Ｍさん（大学院１年生（現職（小学校））＞

今回は一方的に教えこむことの多い授業だったこともあり、教えたメディアを自分たちのニュース作りに活用するところまでいかなかったので論述するのは難しい。

大切なことは、子ども達のニュースを作りたい（編集したい）という強い気持ちがないとメディア（今回はムービーメーカー）を活用したいという気持ちにならないということである。

そういった面では今回の授業ではその意識が足りなかったと思う。今回は、実際に使うだろう機能を最初に意識もないまま教えてしまったが、実際は、子ども達がニュース編集をやっているときに、「～なことをしたいのだけどできますか？」という形で学んでいくのがよかったのではないか。

また、こちら側の準備不足も子ども達の意識を切ってしまったような形になったことを反省している。以下その他の授業の反省点である。

○　学校側に関すること

・　自分たちのニュース番組をつくるための設計図が必要だったのではないか。
　→設計図があるとどこにどの動画を使うかとか、そこに入れるタイトルとかがスムーズに入れることができたのではないだろうか。

○　大学側に関すること

・　ムービーメーカーのどのような機能（取り込み・タイトル・効果等）を最低限教えればよいか打ち合わせをしておけばよかった。

○　小学校側と大学側の連携に関すること

・　最低限のシステムの確認（デジタルカメラとパソコン等）を事前にしておけばよかった。

・ 小学校側のグループの数を確認して誰がどこのグループを受け持つかを確認するとよかった。
・ どこまで児童がやってくるのか、今日の授業でどこまで到達させたいのかを確認するとよかった。

＜Ｉ．Ｍさん（大学院１年生）＞

私が今回のプロジェクトを通して子ども達から学んだことは、子ども達がメディアリテラシーを学ぶにあたって、教える側が子ども達の言葉では表現しきれないニーズを満たす指導展開の難しさと、教えていく上で教師自身のメディアリテラシー能力が向上するのではないかということでした。

今回の課題は、児童たちが事前にテーマとして取り上げた題材をニュースとしてまとめるという作業を通してメディアリテラシーを学んでいく授業展開でしたが、自分はその児童たちとは初対面で、まず児童たちがニュースとしてまとめていくうえでどれが大切なのかという話の構造を掴み取る必要がありました。それは一見関係の無いようなことに考えられますが、子ども達にニュースを製作させるということの目標は、効果的な情報の操作をこども達に考えさせるという視点から考えると非常に大切なことであると感じました。

また、指導時における子ども達の授業前・後のリテラシー能力向上の具体的な例を挙げると、子ども達は当初、ＰＣを前に編集するように担当の先生に指示されＰＣを前にポカンとしていました（思考停止、ＰＣで編集するという手段が目的化している児童など)。これは、多分、情報をメディアの種類に応じてどのように効果的に操作し伝えなければならないのかが分からないことが原因として挙げられるのではないかと思います。

しかし、指導の導入部分において、みんなで一通り児童たちがまとめてきた動画を見ながらこのタイトルであればどのカットがいらないのかなどということを考えさせ、そして児童たちがニュースを製作するために作ってきたものが、我々が日常的に視聴している「ＴＶニュース」とどの点が異なるのかという問いを投げかけることにより、子ども達は「話のヘッダー（主・各論）がない」「ニュースタイトルがない」、「音声がない」、「タイトルテキストの動き・色などの映像効果」などの、操作がないプレーンなテクストであるということを肌で感じ取りどんどん考えていきました。それにより子ども達は話のつなげ方や、その情報の隠された意図などコツのようなものや、メディアから発信される情報の特性などについて少しながら体得できたのではないかと思います。

私たちが日常的に見ているＴＶというものと、自分たちのプレーンテクストを比較すると、自分たちがメディアの初学者である場合、そのメディアがオーディアンスに対して確実にメッセージを伝達するために駆使されている情報操作の技術の差が如実に現れます。私はそのことを講義や本などから情報を得ながら、効果的であるのではないかと感じていましたが、実際にこのプロジェクトを通して体験できたことは大きな収穫でした。

また、子ども達が情報を伝えるという作業を通して、自分以外の子ども達と関わりあい、そこからまた新しい発見や創意工夫があったことを見れたことも、このメディアリテラシ

ー教育のオープンエンドな特色ではないかと感じました。

最後に、今回の授業の反省点ですが、良い点は記入しましたので、悪い点のみ記述すると、まずどうしても時間的な制約があり子ども達にニュース製作を通したメディアリテラシーを学ばせていく上で、グループで話し合っている際、方向性をある一点に収束させるようにもっていってしまう指導をしていたときがありました。メディアリテラシーを効果的に学ばせていく指導者研修が授業の成否に大きく関わるのではないかと思いました。

また、今回編集するにあたり、何のために編集しなければいけないのかが分かっていない班がありました。この点については、ある決まった短い時間の中で、メディアリテラシー教育が比較的理解・指導に時間がかかってしまう特性から、授業担当者の先生に徹底していただきたかったことでした。長くなりましたが私自身このプロジェクトに関わりとても勉強させていただいたというのが感想です。新井小学校の先生方、どうもありがとうございました。

＜Ｍ．Ｏさん（大学院１年生）＞

子どもたちについて

〈ビデオ取り込み〉

ビデオを取り込む操作についてわからないからさわれない、さわろうとしないということはなかったが、あまり説明を聞かず、自分たちの力で先へ進めようとする動きがあった。それによってうまく取り込めないということがあったが、何度か取り込み直しをした。最後の取り込みは途中までうまくいったが、読み込み途中であるが終了まで待てずに早々と停止ボタンを押してしまった状況。自分や友達が画面の中で動いて話していることに大変興味を持っていた。読み込む部分をビデオからの読み込み段階でより細かく切り分けようとする様子が見えた。実際のソフトを使った編集よりも、ビデオからの読み込み段階でのON・OFFの方がイメージ的にわかりやすかったからなのかもしれない。

〈編集作業〉

タイトルつけの作業を説明しているときに子どもたちから自然発生的にタイトル画面の色・フォント変更ができるかという質問が出てきた。その後色をつけたり、文字を変えたり、というタイトル作成にかなりの時間を割いていた。グループの中で何度も話し合っていろいろな色やフォントを試しながら決定していた。何度か同じ色やフォントを行き来しながら決めていた。

また、画面切り替えの効果（スライドイン等）についても何度もいろいろな効果を試しながらグループで合議の元決めていた。こちらは試しながら効果の変化を楽しんでいた。

〈その他〉

私の見た班はマウスを握る子、キーボードを打つ子、等作業が分化していた。

〈教え方の変化〉

前半は自分が操作のためマウスを握りがちだったが、前半の段階で子どもたちの能力が見えてきた。ある程度の用語等が分かることがわかったので後半に行くに従って言葉での指示で子ども主体で操作指示ができるようになった。

〈その他〉

実際にやる内容についての詳細、打ち合わせ等がなかったので、実際に現場に行って混乱した。先方の思惑と当方の思惑がちがっていたので、準備する物も急遽揃えた状況。事前に先方で用意する物、こちらで用意して行かなくてはいけない物、パソコンの状況や、ある程度分かる範囲内での子どもたちの力量、やってきた内容について事前に知ることは必要だと感じた。こちらは、ムービーメーカーの操作のサポートだと思っていたのだが、先方はビデオの取り込みからの予定であった。

＜Ｄ．Ｓさん（大学院１年生）＞

・　子どもたちから学んだこと

今回は、社会科で調べた内容について VTR にまとめる授業であった。子どもたちが表現したいことをビデオに収めている。そこで、感じたのが、表現したい内容が既に理解できているということだった。

ビデオ編集の方法として、不要な部分の VTR の切り取り方を教えたところ、率先して「ここを切り取りたい」「ここは残す」など明確に考えていた。じゃれあったり、ふざけた部分もわかっており、そこは削除して欲しいなど、具体的な構想が出来上がったうえで収録していたことがわかった。

また、テロップなどのテキストで表現したい部分もしっかり考えており、意外としっかり考えているのだなと感心した。ただ、技術が無いため、表現ができないだけであり、技術を身に付けることにより、より豊かな表現ができるのではないか、と期待できる。

・　児童に対する教え方（接し方）

特に気をつけたのが、情報を教える際の配慮を行ったことである。具体的には、間違った表現方法にならないようにと、適切な日本語で表現することの大切さを意識して接した。万が一、テロップ等で意図しない表現方法（誹謗や中傷など）にならないように、また遊び感覚で簡単にできるが故に、お遊びの内容にならないようにと考えていた。

技術的な面では、テロップを入れる方法を実際にシミュレーションを私が行い「こうやってテロップを入れるんだよ」と事例をあげて目に見えるような形で教えた。

・　担当の先生の対応

厳しい言い方かもしれないが、担当する先生もある程度、従事できるように学習していて欲しかった。確かに、ビデオで表現することは大切であるが、担任の先生がある程度手に負える内容でなければ、イレギュラーが発生したときの対処ができないと感じた。（実際に、私は１月２４日、初日の参加であったが、下準備がなかったこともあるが、もう少しコンピュータリテラシーがあればよかった）

また、コンピュータが動かないと授業ができないのではなくイレギュラーがあったとしても統制が取れるような対応にして頂きたかった。

＜Ｒ．Ｇさん（大学院１年生）＞

日本は中国と比べて、先進国ですから、特にＩＴ産業分野では、世界の最先端の技術を持っています。ですから、ありとあらゆる分野では、ＩＴ技術が活用されています。
例えば、情報教育分野では、ＩＴ技術を使って、教育実践活動を行われる場面がどこでも見られます。私はいま、上越教育大学大学院情報教育分野で学校教育臨床技術について、勉強をさせていただき、ＩＴ技術を利用する小学生用の教材の研究開発に取り組んでいます。

先日、新井小学校で動画編集活動の支援指導をさせていただいた中で、子供達の元気な様子やメディアリテラシーについての熱意などがものすごく印象に残りました。子供達との触れ合いにより、学校で勉強した理論知識を実際に現場に持っていって、実践実例活動の形にする難しさや情報活用能力の重要性を肌で感じました。大変いい勉強になりました。

日本での留学を終えた後、日本で学んだ知識を中国に持ち帰って、私の故郷である西安に住んでいる貧しい地域の子供達が日本の子供達と同じように、豊かな学習環境の中で、すばらしい教育制度を受けられるように、自らの力を注ぎたいと、いまの私は、その夢を実現するために、これから、もっと頑張りたいと思っております。